

異流からの選択集の法難に対する聖光の顕彰的態度

出 井 真 有

聖光の著書は広く選択集の謗難を契機として、正統相承の愈を強くし、邪義を破邪顕彰の下に、祖道を極々し、師承を光顯せんとする時代性のある顕彰的著書と、一見して云える。法然の教義が本集に見られるように、聖道門を捨て、淨土門に帰する處に根底を置き、諸行雜行を捨て、本願の口称念仏一行に結皈するもので、聖道門からの排撃の根本原因となる處にある。

其れを説く根本原典たる本集の流傳は、守護國家論に、「門弟伝此書充滿六十余州」(淨全、八、八二一、下)と云う如く、流傳し、旧仏教々団に大打撃を與え、本願念仏は民衆に受容せられた。此の隆盛は選時抄に、「サレバ後世ヲ顯ハン人ハ、叡山、東寺、圓成寺、七大寺等ノ、日本一州ノ諸寺諸山ノ御歸依ヲトメテ、彼等以ニヨセヲケル由富郡卿ヲウハイトテ、念仏堂ニツケハ、決定往生辭無阿弥陀仏とススメケレハ、我朝一同ニ具ノ義ニナリテ、今ニ至十余ナリ。レハ大正、六十四卷、二六九〇頁」と言ひ、又玄正安國論(淨全八、八三九)に、同じ龜のことに述べているのは、旧仏教界に經濟的大打撃を与え、反面念門の教団經濟を好調にしめたと言える。かゝるごとく經濟面をも十分伴ひ、又伴う條件の下に置かれたことが、他面

、流伝も其の軌道を順調に進んだものであらう。このこと何教義を合せて、聖道各門の本集排斥の要因でもある。聖光の著に表れたる本集への謗難は、刊版初めの建丁二年に、即ち流伝の初期に出された推邪論の論難を、晩年の作である徹選釈集に取上げ、「為顯光師上人（は）底學博賢之智徳也」と言い、持戒、菩提心の実を又々聖淨兼学の所にして、解し得るとし（浄七、九〇―九五）本集を顕彰している所であるが、今は異流の謗難についてみよう。

本集の流伝史上に於いて、外的法難は加えられているのに、聖光の著書では、念仏名義集、末代念仏授手印、念仏三心要集等に、一念教、仏願義、寂光淨土義を邪教とし、ことに各百問答に一念教を破斥し、徹選釈集に總じて安心門を上げる等の破邪顯彰の態度は、一見して安心門に其の主体が置かれてみるとみられる。このことは如何なる理由によるか。

安心門とは辛酉の一念教、行空の寂光淨土義、証空の仏願義、それに親鸞の真宗義である。聖光は末代念仏授手印（浄全十、一〇）に辛酉、証空、行空の教を上げ、加之「此三人義近代興盛之甚也」と言い、又、「已上三義是邪教也可忍可忍」と述べ更に、徹選釈集に、「此則第六天之愚民也殊陀仏之怨敵也」（浄全七、九六、下）というごとく、痛烈に破斥している。一念教は勅伝二十九に、「多念の教遍はひけだ無益なり」と言て、一念教と言ふことを自立すと言うごとく、教遍の念仏に対する一念を立て、念仏名義集に「安心門不知して申さんずる念仏何仕生すまじ」と言ふごとくで、又弘願門も、此弘願門の深き心を不知人は往生出来ずといふ、教遍の念仏を排し、行ずる功德を認めない逆逆をなし、聖光の上に強く教遍の念仏を立て、起行門の立場をこらしめた。即ち法然は七ヶ條起請文（浄全九、五〇五）に、「念仏は救道をなすべし」といふ、又「念仏をあほく申さん」とて、日々に六万遍なごくりぬたるは、他力をう

たがふにてこそあれといふことのおほくきこゆる。かやうのひが争、ゆめ／＼もちかべからず
しといふ、自からも六、七万遍を林えられたことは勅伝に言ふ所である。法然の伝燈を継いだ
聖光も亦、毎日六巻の山至、六時の礼讃、六万遍の念仏を勤めてあり、安心門に對した態度は
聖光として当然のことと言える。

更に末代念仏授手印序に、「以林名爲先以教通爲基」と、其の理を説くも亦教選採集へ浄全
と、九七二に、安心門の教通をやむるとなゆき、かなしまれてゐる。いかに教義の上における
教生のための取扱ひ方の相異とは言え、法然門下として其の意義を全く解せぬのは、「拋選
採之真文正義」へ浄全七、九七、上と聖光をして云わしむる所で、本集真意の流伝の上に、
大なる法難といえる。

安心門に主体を置かしめた今一つの疑は、一念というは、二人が心を一つにするといふこと
で、二人の心が合体した所に一念の義が成り立つといふので、念仏名義集に言ふ林が起
ると推察される。安心門は名義集、授手印、教選採集に言ふごとく、隆盛をするが、この隆盛
は明月記に言ふごとくの邪行を起すもので、權邪論に「在家千万門流所起種種邪見」へ浄全八
、六七五と言わしめたといえる。かゝることは聖道門からの法難の一原因とも、言え、聖光
をしてこゝに主体を置かしめたものであらう。かくして聖光に悲しみと、相伝の念を強起せし
めた。即ち授手印序に、「丈念仏空處浄土之業悲哉悲哉」と言い、又同書に「於此間徒惱失林
名之行空悲處正行之勤且爲然師報恩且爲念仏興隆任弟子昔師依沙門相伝録之留贈向後」へ浄全
十、一、下と言つは無量の感がある。

戦乱の引き起す國民思想一厥欣心は、本集にくく念仏の思想がよく受容せられ、ここに巧に

本法思想に結んだ安心門の隆盛はなされた。愚動住心が常陸國で集記した、私聚百因緣集卷七の、我朝仏法緣起由來の項に、「黒谷源空上人法然興浄土教。門下之有之門徒數千萬」(一仏教全書、一四八卷、一一六頁)と云う如く、門下全体の隆盛を示し、其の中に、念仏名義集に、「日本五畿内七道念仏ノ最ヲ申候人如雲霞。一人非法然上人御教」とするごとく、安心門が盛えたことが知られる。かゝる邪義の隆盛は眞の本集流伝をなすものでなく、これに対する聖光の態度が、全書を通じて、顕彰の意の下に書かれて来たものである。

念仏門に而たの多く集ることに于して、浄土門各派において、正統相承を主張すること加へ受けることで、其の反面、當時聖道門からの攻撃は、痛烈を極めたし、門下の中に緊張複雑な態度が見られた。自門維持興隆のため、教義上まで妥協天台的方向として表れて来た。聖光に於いても此の点全く否定することは出来ず、そうした外面争情と門下邪義の隆盛のため、顕彰の態度は内部にむいている。聖光と態度を共にする源智は、選択要決を以て、諸行本願義、安心門各流を批判し、聖光に於いては、前卷への批判は、見当らずとも、安心門は前述のごとく批判せられ、本集の流伝を真に導かんとされた。聖道門からの攻撃は、總て念仏門に当てられるも、念仏名義集に、「都ヨリ始テ日本五畿内七道ニ念仏ノ邪義拡ル」という如く、安心門は一入隆盛し、聖光派には大打撃を与えたが、よく聖光は二祖としての任命をまつとうさしている。

註 中 大庄徳成氏の日本仏教史研究、鎌倉中期における浄土教、参照のこと。

以上